極道の花婿くん

佐東

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
極道の花婿くん

【Ｎコード】
Ｎ１９３７Ｚ

【作者名】
佐東

【あらすじ】
すべての原因は、僕が平凡な人間で、庭師の息子だったことにあるのだ……「俺のことを好きと言え」――って、何が悲しくて脅迫されて男に告白!?　一般ピーポーによる、極道の偽りの花婿としての波瀾万丈な日々が始ま……らないでほしい切実に！そう、始まらないよう阻止したい物語。ラブよりコメディをとりたい。うすらＢＬ。

脅迫された

とある理由で、僕が不幸な人生を歩むことになったのだと思うと、僕は僕をうんだ両親を恨まずにはいられない。

すべての原因は、僕が平凡な人間で、庭師の息子だったことにあるのだ。

「……今まで、隠してたけどな」

通い慣れた極道屋敷の庭で、いつも通り父さんの手伝いをしていた。最初は恐れ多く、脳細胞が死滅しそうなほど緊張したものだったけど、たくさんの出入りする極道の方々は一般ピーポーである僕たちなんかこれっぽっちも眼中が無いと分かると少しは楽になった。

近くに縁側があって、奥の畳部屋でなにやら重大そうな会議が始まろうとしていても。腰を落とした強面のおじさんたちの間を厳格のあるじーさんがのっそりと歩いてこようとも。言葉の端々に血なまぐさい単語を織り交ぜ、緊迫した空気を演出していようとも。

……ああ、平和だ。

空を優雅に飛び回る鳥を見上げつつ、額の汗を拭う僕。

いつの間にか、現実逃避が上手くなっていた。

「俺は……」

だから、じーさんの向かいに立った男が強く何かを主張していたことにも、その内容が少し特殊だったことにも、それから、こちらに向かってきていることにも、気付かなかった。
僕は、残念ながら気付いていなかったのだ。

「真央っ」
「……あ、え、何、父さん？」

慌てて手元から目線をはがし、父さんの指さす方を見る。
着流し姿のすらりとした体格の男が、ちょうど僕に手を伸ばすところだった。腰をぐっと引き寄せられ、手にしていた剪定ばさみを取り落とす。
何も理解しない僕に、おじさんたちの驚愕の眼差しが突き刺さる。
なんか、誰かと、密着してる。

……うん、どういうこと？

ぎぎぎと首を回して見上げたら、すっと通った顎筋が目に入った。一切こちらには目を向けず、決意のこもった眼差しでその先を見ている。
見たこともないような綺麗な顔に見とれ、僕はまた疑問を忘れていた。

「俺は、女になんて興味はねぇ。俺が好きなのは、こいつだ！」

一瞬にして我を取り戻した。

呆然とする父さんはもちろんのこと、世界の終わりのように絶望にくれる強面のおじさんたち、何故か強気でどうだ分かったかと胸をはるこの謎の男を前に、まずは説明が欲しいと冷静なのが、この僕。

今し方愛の告白をされたような気がするのだけど、なにぶん今まで関わったことのない人だし、それによりによって怖い関係の人だし、それどころか男同士だし。

現実に真っ向から受け止めることはできず。

眉をひそめて見上げ続ける僕の視線も、いまだ受け止められていない。

「何を、言っておる。お前には早く妻を持ち、わしの跡を継いでもらわねばならんのだぞ。そのような戯れ言を聞いている場合ではない」

「だから嫁はまだいらねーんだよ。んなほいほいと結婚できるか」

「これはこの小笠原組が出来てからの決まりなのじゃ。跡を継ぐためには、妻の支えが無ければならん。人の上に立つ上で大事なことなのじゃぞ」

「俺は俺一人の力で組を率いてみせる！　古いしきたりなんぞ知ったこっちゃねーんだよ」

「リュウ！」

……なんか親子げんからしきものが始まったぞ。怖え。この人が力こめる度に僕の肩がミシミシいってんだけど。痛え。
それはそうと、話の内容からものすごく恐ろしげな全貌が見えてきた。
組がどうの、跡を継ぐだのなんだの、妻だのと……これ、結構デリケートな極道の話じゃね？
「だから、俺は、今こいつしか眼中にねーんだよ！」
その渦中に、なぜ、僕が……！
こいつしか眼中にねえって、こいつだけは眼中にねえの間違いじゃない！？
「女と結婚なんかしねえっていってんだろ！　俺はこの男以外認めん！　絶対に認めん！」
この人、明らかに僕のことダシにしてる！
「あ、あのー！」
分かってしまったマヌケな真相に、僕は抗おうと勇気を振り絞って声を上げる。言い合っていた二人は最初ひたすら気付かなかったけど、何度か大きな声を出す内にやっと言葉が届いた。

「ぼ、僕、帰っていいですか……？」
「そうだ、おまえさんからもリュウに言ってやってくれ。分家の娘たちから早く嫁を召し上げろと」
「しねえって言ってんだろ頑固じじい。おい、おまえ、俺が好きなんだろう！」
「そうじゃなくて……」

誰も聞いてねえしな。
僕、どっちの味方になるつもりもなければ、自分の平凡な人生を守りたいんですけど。

「ああ？」
「ああ！？」
「ひいいいっ」

しかし、お二人から鋭い眼光で睨まれ、亀のようにきゅっと首を引っ込める。
え、えええ、どうすればいいのー……？
助けを求めて、父さんの方を見れば、すでに忽然と姿を消していた。父さん、今僕は、あなたから生まれたことを激しく後悔しました。

「……いいから、おまえ、俺のことを好きと言え」

泣きそうになる僕の耳元に突如暖かい吐息がかかる。囁かれた言葉はこれまた恥ずかしいものだった。

なにこれ、ほんと、何プレイ？

この場はどうあれ、艶めいた仕草に我知らず顔が熱くなる。そうして俯くと、聞こえてるのかと顎を引き上げられ無理矢理顔をあわせられる。

ひーっ。

やめろ、その顔はあなたの武器ですか。綺麗と表現するに何の間違いもない端正な顔立ちに、男の僕でさえ息が詰まる。断じて言うが、僕にはソッチの趣味はねえ。

「言わないと、強引にでも証明してやるぞ」

顎を掴まれたまま、強引に顔が迫ってくる。

こんな脅迫ってあるか？　今なら、殺してやると言われるよりもやたらリアルに恐怖を感じる。

僕はすぐに喉から声を振り絞った。

「僕も心からこの人を愛しています！」

妙にクサいセリフ出た。

いちゃつかさせられた

そこから、僕と不良の不思議な関係が始まった。

いや、始まってしまった、と言う方が正しい。だって僕は微塵も望んではいないのだ、年齢＝彼女いない歴だろうと、高校生は青春を謳歌しろと校長先生が言っていたとしても、それこそこの状態をクラスメイトの女子に羨ましがられていようとも。

……だって、なあ？

相手は、極道の若頭で、男だ。

「お前も立派な人間になったものだなあ。小さなころは、セーラームーンとケッコンするとか宣言してたくせに」

そう言うことは蒸し返すなよ。

クラスメイト兼、幼き頃からの親友である慎太郎が茶化すでもなく半ば本気な面もちでそう言ってきた。

ちなみに僕は小さな頃から強くてかわいい女子が好きである。自分が弱虫ということはとうの昔に自覚しているため、守ってくれる彼女というのが理想だったわけだ。

「それがまさか、今や小笠原先輩の嫁候補だとは」

……理想とはうらはらに、僕にあてがわれたのは強くてかっこいい男子だなんて、それ、ただの虐げてくる彼氏じゃないか。

いろいろと間違っている。
僕は慎太郎の真面目な関心声に否定も反論もできずに、深いため息を付いた。

小笠原組というのは、この地域に昔から我が物顔で存在する極道一家だ。先祖が有名な政治家のお偉いさんだったということもあり、我が家が三十個は入りそうなでかい屋敷を拠点とし、その一方的な権力と力を振りかざしてこの地域一帯のヤクザを制圧している。
そして、そんな恐れる小笠原組の長男であり、跡取り。その名も小笠原竜人……さん。
いきなりダシにされ嫁候補にされ、何が一番やっかいだって、同じ学校だってことだ。存在はずっと知っていたけど、まさかこんな風に関わることになるだなんて思いもしなかった。せめて後一年でも遅ければ、小笠原さんも卒業してて、僕も何食わぬ顔して逃げられたに違いないのに……。

ぶるぶるっとポケットが振動して、僕は喉の奥、ヒイイと悲鳴を上げた。

「お、お呼び出しか？　愛しい旦那サマの」

恐る恐る携帯を取り出してゆっくり画面を確認する僕を見て、慎太郎が今になってニヤニヤとからかう口調だ。
何が愛しい旦那サマだ……。
ふらりと立ち上がっていつも通り教室を出ていく僕の背中に、いってらっしゃいという慎太郎の呑気な声と女子のヒソヒソ声がのしかかった。

一ヶ月もずっとこれなんて、僕の寿命が心配だ。

「遅え。寄越せ。今すぐに」

急いで教室に駆け込んだというのに、開口一番、罵られた。うおい、メールが来てから一分と経ってませんがね……というのは、到底口にしません。スンマセン、と即座に謝りつつ、用意していた漆塗りの弁当箱をサッと忍者のように差し出す。

軽く睨まれ、鼻を鳴らしつつ、ぶんどられる。

小笠原さんから来たメールの文面はそれこそ「いますぐおれのもとへこい」だった。面倒ごとが嫌いな性質らしく、絵文字も漢字でさえも一切使わないメールは憎らしくも男らしい。

面倒嫌いなら呼び出すなとは思うけど、生まれた瞬間から人の上に立つ存在だったこの人にとって、命令も呼吸をするのと同じらしかった。

弁当箱の蓋を開けた小笠原さんが、ぎゅいっと眉間にしわを寄せる。

この瞬間、ほんっとやだ。極道の女たるもの、夫には誠意を尽くし、身を捧げ、愛情を注がなきゃいけないらしく、昼の弁当の準備までしているんだけど、これがまた。

ただのしがない男子高校生が料理とか。できるわけねえだろ。

「中身……コンビニ弁当じゃねえか」

げえ、やっぱバレた。

「いつになったら本気で作ってくる気だ？　ああ？」
「すいません、だって、僕のへたくそなおかずよりコンビニの方がよっぽどおいしく愛情に溢れてると思うんですが」
「てめえは、機械より無機質な愛しか持ち合わせてねえのか？　ああ？」

いやっ、そういう意味じゃなくっ。
ガンッと、机を蹴る音に床で正座をしている僕の首がぐひいっと竦む。音につられてか小笠原さんのクラスメイトの視線が集まるが、僕にはもう慣れっこなので今更羞恥心は無い。むしろ恐怖心。
冷や汗たらたらな僕は、すぐに信用を取り戻そうと首をスポンッと伸ばして渾身のネタを指さした。

「これっ、小笠原さん。これ、見てくださいよ。これこそが僕が作ったものなんです。きれいでしょこれ」
「これこれうるせえ」
「スンマセ」

ぐひい。
伸ばした僕の指は、小笠原さんの箸で横にぞんざいにどけられた。
その箸が摘んだのは、光沢のある深紅のバラだ。

「飴をとかして作ったんです。熱い内に形を作るのが難しくて四苦八苦しましたけど、これが一番良くできました」

こうしてコンビニ弁当だと怒鳴られることは想像の範疇だったので、言い訳のためにも準備しておいたものだ。飴細工は初めてだったけど、溶かして形作るだけだったから意外と僕にもすぐできた。というより、指先一つ一つで見た目の味が変わってしまうのがおもしろく、ハマって昨晩は夜通しやってしまった。
そんなこんなの自信作ですよ、と期待をこめた目で見るも。

「弁当に飴入れるヤツがどこにいる」
「ええっ、ダメですか？」
「却下」

……らしい。
なんだなんだ。ひとに弁当作れと命令しておいて、せっかくの自信作を非常識だと突っぱねるなんて。それこそでかい器で、やればできる男だと誉めてもらわねば。僕、誉めて伸びるタイプだから。
いや、何が伸びても困りそうだから良いけど。

「真央」

名前を呼ばれて顔を上げると、頬に冷たい感触がした。
あ、来た。来た来た、いつものヤツ来た！
ガキンと氷のように体をかたくすると、小笠原さんが確認するよ

うに視線だけで辺りを見回した。ええもう、分かるでしょ、そんなことしなくたってみんながこっちを見ていることくらい。
ふん、と鼻を鳴らした小笠原さんは僕の脇の下に手を入れ簡単に持ち上げると、隣の机の上に座らせた。
ヒイッ、という僕と後ろの席の真田さんの悲鳴がカブッた。あ、ずっといたんですよね、スイマセン。

「寄越せ」

開口一番の寄越せとは違うことは経験上分かっている。こうして、机の上やら、あろうことか膝の上にまで乗せられたときには、寄越せの意味合いは変わってくる。
つまり、食べさせろってことだ。
……ねえええよ。

「おまえの一番、どれだって？」

いらんこと言わなければ良かった。これですね、ええ、と僕の震える箸さばきが深紅のバラをとらえる。いや、これをどうしろと？今やクラス中が僕と僕の箸の行方に注目している。これにはどれだけ経っても慣れない。慣れるほうがどうかしている。

「お、小笠原さん」
「呼び方。くち、開けてやんねーぞ」

だったら鼻にぶちこみますよ！？
……は、どうしても言えないので。うがあーもうっ！

「りゅうとさん、はい、あーん！」

見るに耐えなかったので、目をつぶってからその口元に箸ごとぶんなげた。
全僕の細胞が、燃えた。

「おまえな……」

苛立ちを含んだような声と、がりごりと飴をかみ砕く音が耳に響く。知ったこっちゃねえぞ。
だいたい、なんでこんな風にバカっぽく正しくバカな正真正銘バカップルをしなきゃいけねえんだい。
僕、男おとこ！　いや、この場合男だからこそ目を付けられたんだけどさあ！
きゃあ、と密かに女の子の悲鳴が上がって、僕はウンザリ。

「マズイ」

近づいてまるでほっぺにちゅーするみたいに、囁かれた味の感想。
声が聞こえていない周りから見ればそら仲むつまじいバカのつくカ

ップルに見えていることだろうけれど、実体はなんてことはない、ただの虐げるものと虐げられるものの関係だ。
　僕の一番って言ったそばから、けなしたよこれ！

「……いつまで続けるんですか」

間近にある小笠原さんの整った顔立ちを見ながら、僕も小さく問いかける。
　本当に好きあってもいないのに、他人には仲の良いカップルだと思わせるウソの関係を、だ。
　こうして顔をつきあわせているのだって、どうせ周りから見れば秘密の睦言を交わしているとでも思われているんだろう。

「親父が諦めるまで、だ」

簡潔に返された答え。黒い瞳は、強い決意を宿していた。
どうしてそこまでしてして、女の人との結婚を拒むんだろう？
男といちゃつくくらいだったら、スパンッと清く正しく女性と結婚したほうがいっそ楽だと思うけどな。
　と、怪訝な目で見ていたらしい、スパンッと頭をはたかれた。次を寄越せ、って、あーもう好きにしてくださいよ。鼻の穴にでも、耳の穴にでも、好きなだけ寄越しますとも。

屋敷に連れ帰られた

学校への行き帰りは、その後ろをひっそりと付き従うというのが、小笠原さんの嫁候補としての決まり事だった。

金持ちなら車というイメージがあるんだけど、極道は違うのかはたまた小笠原さんだけ違うのか、いつも歩きだ。三十分ほどの道程、小笠原さんは顔が知れているのか常にチラチラと見られていた。

うん、まあ、だからこそなんだけど、たまにこうして肩を組んだり手を繋いだりと、はたして理想の嫁像と合っているのかは別として、バカップルっぷりを披露させられている。

「チッ」

小笠原組の極道屋敷、そのでかい木の扉に辿り着いた瞬間、忌々しく舌打ちされ手を投げ捨てられた。

おおおい、あからさまだなあ。こっちだって繋ぎたくねーわ！

汗でドロドロの手のひらを制服のズボンでごしごしと磨き上げる。

「来い」

って、いつもはここでお別れのはずが、今日は中まで入れられるらしい。ええ、やだなあ、父さんの付き添いで入るならともかく、この若頭と一緒だろ？　つまり、ギンギンに鋭く注目されてしまうってことで。

できることならパンピーのままでいたい僕。今日も平和な青空は、

前に見たときとは違ってため息を付きたくなるほど重かった。

連れてこられたはいいが、しばらく待ってろと部屋に通された僕は、どうせ暇だしと縁側から庭へと出てきた。

父さんの手により剪定された緑の草木は、風通しまで計算されており虫さえ一つも付いていない。造園には欠かせない庭石や灯篭も、父さんのセンスにゆだねられ家主の満足のいく配置をされている。池から一定間隔でポンポンと無造作に置かれているように見えるが、それも計算尽くで後ろに見える景色との兼ね合いもあり風情を感じさせる。さすがだ。

この屋敷は、こうして父さんの手が加えられた庭がたくさんある。というより、実質建物よりこの庭の方が大きいと言っても過言ではないと思う。

僕もいつか、これくらいでかい家の庭を一人で立派に仕立てたい。汗水垂らして働く父さんの背中を見てずっと夢見てきたことだった。

そんな思いを馳せながら庭を見渡したとき。

いつからいたのか、ヤンキー座りをしていた三人のイカツイ男性陣と目が合った。ひぃぃ。近づいてくるなり僕の全身をなめるように見回し、最後に「コイツがなあ」「男だなあ」「信じたくねえなあ」とそれぞれもらしガックリと消えていった。

……いろんな意味で、ほんとどういう意味。

「こんにちは。お義姉さま、ご機嫌いかが？」

僕こそガックリしていると、背中に今度は柔らかい女の子の声がかかった。おねえさま！？と驚いて振り返ると、そこには黒地に桜吹雪の入ったすげえ着物を着た美少女が立っている。

「はじめまして。挨拶がまだでしたわね。わたくし、小笠原魚姫といいますの」

「うお、ひめ？」

「ふふ、変な名前でしょう。竜人お兄さまの妹ですわ」

「はあ、はじめまして。篠田真央ですが」

「知ってますわ」

ひらっと蝶が舞いそうなほど可憐な仕草と声で、美少女が笑う。胡散臭いというか、わざとらしいというか、その口調も相まって不思議な感じがする。

それにしても、妹さんか。いるなんてしらなかったな。いつもこの屋敷に出入りしていたけど、女の人一人も見かけたこと無かったし。

「っていうか、おねえさまって」

「お兄さまと結婚されるのでしょう？　法律上まだ婚姻関係は結べませんけれど、この世界じゃ寝床を共にすれば夫婦として認められるのですわ」

ウソだろ。そんな簡単に夫婦になってたまるか。ふふふっという笑い方がやっぱり胡散臭い。

魚姫さんはその腰にまで届く長い髪をふわっとなびかせ、僕の側

にまで歩み寄った。
「お兄さまのどこが好きですの？」
「好きっていうか、むしろそれは僕が聞きたいくらいだし」
「まあ。理由が見つからないほど盲目に慕っていらっしゃると。それじゃあ、告白はどちらから？」
「え、ええと、好きと言えと強制的に口を割らされた感じで」
「まあぁ。お兄さまもお人が悪い。先に言わせて恋愛の主導権を握ったのですわ！」

あれぇえ？　僕、言い方間違ってるかな。変な方向に誤解されてるんですけど。
兄妹とはいえ、僕とお兄さまのウソのカップルを知らないらしい。魚姫さんが敵だか味方だか知らないけど、本当のコトを言ってはダメだろうか。

「お兄さまに真央さんのことを聞いても何も教えてくださらないの。まるで興味ないって言いたげに……酷いですわよねえ？」
「いえ、興味ないんですよ、本当に」
「あら？　悲しいことを言っては駄目ですわ。今までお兄さまが好きだと言う他人は一人もいなかったのですから……今となって、それは女性ではなく男性が好きだからだと判明しましたけれど。とにかく、自信をお持ちになって」
「は、はあ」

本当に労りの気持ちを込めて、肩ポンされた。自信持っちゃうの

はダメだろう。僕こそおかしな方向に突き進んで行くぞ。

「あのー、魚姫さんは、嫌とかじゃないです？　お兄さまがまさか、男が好きだということは」

本当のことじゃないが、共犯でウソを付いているゆえ、僕にも罪悪感。目をそろーっと泳がせつつ、堂々とした出で立ちの魚姫さんを見るとプッと吹き出された。

「人の趣向なんて、知ったこっちゃないですわ。私は正当に男性が好きですから、他の人がどうであろうとどうでもいいんです」
「自分以外、どうでもいいと？」
「ええ。それが例え実の兄であっても」
「……サッパリしてるね」
「よく言われますわ」

ほんと羨ましいくらいサッパリしてんなおい。

「まあでも、お兄さまの気持ちも分からないではないですわ。組のしきたりに沿って女性と結婚した父も、形ばかりですぐに離婚しましたから。夫婦とは儚いものだとわたくしでも思いますもの」
「そうなんだ……それは辛いね」
「そう思ってくださいます？　優しいのですね」
「だってそうじゃなきゃ、男を好きだとまで言って結婚を拒否したりしないでしょ。そんな風に考えがねじまがるなんて、そりゃーも

う、考えるだけで辛いし怖い」

　魚姫さんは、目をぱちくりとさせると、あらまあ、とうわごとのように呟いた。思ってもみない反応に僕こそあらまあ？だ。

「母親をなくしてしまったことではなく、考えをねじまげてしまったお兄さまを辛いと思ってくださるのですね」
「あ、そうか、今の言い方だとそうなるね。ごめんなさい、そういう意味じゃ……」
「あら、別に責めてるわけじゃないんですわ。偽善じゃない、極道的な考え方ですわね。素敵ですわ」

　ほっぺたに手を当てて、うっとりと呟く魚姫さん。
……に、うおおい、と青ざめる僕。見るからに一般ピーポーな僕に与える賛辞ではないよそれは。全くもって嬉しくねえ。
　一歩仰け反って風情立ちこめる庭の一部になりすまそうとする僕の肩を、もう一度ポンされる。

「応援してますわ」

　ニッコリと、小笠原さんに脅されるのと同価値がありそうな笑みを向けられて、僕は庭の一部になりきれず、浮いた存在のままぎこちなく頷いた。
　なんだったら、小笠原さん、この子がゴクツマにふさわしいと思う。

ファミリーに見せつけられた

僕が現実に打ちひしがれ、一人畳の上で涙し俯せていると、小笠原さんが戻ってきた。あの色気あふるる着流し姿だ。僕の姿を見るなり、何してるんだと呆れヒャクパーで聞いてくるので、何でもないんですよとなけなしのプライドをもってそう答えた。

「どっかズレてんだよおまえ。ネジか？　ネジねえのか？」

なんだ失礼な。そんなもんはいいから身長が欲しいですと心の中で答えた。……別に、低いわけじゃないんだと思うけど、まだ中学生だという魚姫さんと同じくらいだったってのがなんかシャクというか……。

今でも見上げなければ顔が見えない小笠原さんが憎たらしいというか。この兄妹より身長が高ければ脅しにも笑みにもすぐには屈しなかったと思うのに。

「小笠原さん」

どこか違う部屋へと案内されながら、僕は声をかける。小笠原さんは、振り返るでもなく返事をするでもない。いつもながら他人の目がないときはトコトンそっけない。

構わず続ける。

「あの、交換条件をください。この家の人を諦めさせるまで、僕、あなたを好きなフリをします。だから、それが叶ったら、僕のお願いも聞いてくださいませんか」
「……ああ？」
「ひぃっ、だ、だって、一方的にやれって言われたって理不尽じゃないですか！」
「これまで黙って従ってただろうが。何が不満だ、ああ？」

不満すぎる。今まで黙ってたのだって、だって、怖かったからだし。この状況に慣れてくると、よくよく不満が募ってきた。

「あのっ、僕にも庭の手入れさせてください」

意を決してお願い事をする。
あ、立ち止まった。肩越しに振り返って怪訝な目で見てくる。

「庭あ？　なんでそんなこと言いやがる」
「僕、昔からこのお庭が好きなんです。おおきいし、土台が良いし。少しくらい僕の手で綺麗にしたいなって」
「……却下だ」
「えー！　そんな無体なあ！　ちょっとだけですよ、ちょっと！」
「うるさい。却下」
「スイマセン」

結局睨み一つで黙らされた。理不尽だ、うう。

そうこうしているうちに辿り付いたのは、一面畳の縦長い部屋だった。何この部屋。よく時代劇とかで見る、お殿様がいるような部屋だが、その一番前、由緒ありそうな掛け軸や高価そうなツボが置かれたその前に、ドンと二人掛けの黒いソファが居座っていた。

えーなんか合わない。畳にはやっぱりザブトンだよね。

そんなことを思ってた、くいと肩を抱かれて部屋の中へと誘われる。

ギョッとした。

前しか見ていなかったけど、中央から後ろは全て人じゃん。それぞれヤンキースタイルのイカツイ男たちがあぐらをかいて座っていた。僕と小笠原さんの入場を物々しく見つめている。縁側には魚姫さんが座っていて、ヒラヒラと手を振っている。

「な、なんですか、これ」

小声で問うも、黙ってろと言いたげに肩をギリリと潰された。いや痛え。

ソファの前に辿り着くと、小笠原さんはまず僕を座らせた。ボッフンと僕のお尻を包み込むソファの弾力の心地よさと言ったら。しかし感動している場合ではない、次に襲い来るのは、僕の膝に乗る小笠原さんの頭でした。

僕は、ソファではない……！

と、言えればどんなに気が楽だったか。実際に口から出たのは「

ギャッ」とかいう鳥が首を絞められたみたいなか細い悲鳴だった。
いや、これはどんな酷い絵面になっているのか、想像するだに恐ろしい。お膝抱っことか、お手て繋ぎとか、それはまだ許容できるとして……いやできないが！　膝枕はちょっと、かなり、洒落にならんだろう！

「おおおおおおがさわら」
「もっと可愛い声は出せないのか？」
「いやいやいやそういうプレイをしている場合でなくて」
「だったらどうすればおまえはその気になってくれるんだ。人が見ているからって恥ずかしがる必要はねえだろ。いつも通り甘えてこいよ」
「あ、あまえてなんか……」
「ああ？」

誰か止めてよヘルプミー！　ダメだこの人、人に見られているときの演技力といったらパネエ！　それほどまでに結婚を拒否したいか！
ぞわぞわと鳥肌を立てる僕をさらに追い込むかのように、小笠原さんはまず僕を下から妖しく見上げ、ヘビみたいに這いながらソファの背もたれに手を置いて囲ってくる。近い。本気でちゅーする五秒前。本気で茫然自失する一秒前。

「これ、何やっとるか」

オッサンたちの、固唾を呑む音やら悲鳴やら騒ぎが大きくなると

同時、ひときわ威厳のある声が部屋に響く。
「なんだ、遅かったなジジイ。いいところで邪魔しやがって」
やっと離れた……。しかし、今度は姿勢正しく座る僕の肩を枕にしてソファに寄りかかったため距離感は先ほどとあまり変わらない。だらしなく片足をソファに上げた格好でのっそりと歩いてくる小笠原組組頭をひょうひょうと茶化す。
「何が邪魔じゃ。わしは認めておらんからの。本気でもわしらを欺く冗談だとしても、おぬしらの関係は許し難し」
「何を言ったたって俺は決めているからな！　結婚はしねえ。だが、てめえの跡は俺が引き継ぐ。早くくたばりやがれってんだ」
「フンッ、簡単に譲ってたまるものか」
「くそジジイが！」
ギャー僕のすぐ側でケンカしないで。力任せに僕の膝握りつぶしてるし、小笠原さん、痛い痛い！
ジジイ……もとい、小笠原さんのお父さんは、ソファに来るなり僕らを力任せにひっぺがしてそのソファを陣取った。畳に転がされた僕はいち早く体勢を整え、さらにお父さんに噛みつこうとする小笠原さんの腕を引っ張って止めた。
「い、今ケンカしたって無意味です。ここは穏便に済ませて、ここぞってときに逆らいましょう、ね？　力の使いどころを見極めてく

ださい」

小笠原さんは、舌打ちをして僕の腕を振り払った。それ以上は黙ってくれたので、どうやら僕の言うことを聞いてくれたらしい。

後ろにいる男たちと同じように二人して座り直す。

組長も、満足したのかふんと鼻息をつくと、口を開いた。どうやら、このために集められた本題が始まるようだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1937z/

極道の花婿くん

2011年12月6日23時53分発行